

韓国の巫俗儀礼と憑霊

The Shamanic ritual and Spirit possession of Korea

川上新二

Shinji KAWAKAMI

Abstract

Spirit possession often occurs at shamanic rituals of Korea, and it can be classified into four types. First, shamans make themselves possess spirits through dances and songs, in this case shamans control spirits and almost never make mistakes. Secondly, when clients attempt to contact with spirits that have particular relations to them through dances and songs, these spirits sometimes possess the clients, but this kind of circumstance rarely occurs. Thirdly, spirits suddenly possess clients. In this case, spirits have the initiative to possess, but it is rare to happen. Fourthly, shamans make spirits possess clients, but sometimes it ends with failure of possession. This article is about to study spirit possession that occurs at shamanic rituals of Korea.

Keywords: 憑霊（精霊憑依）、韓国、巫女、儀礼、クツ

1. はじめに

周知のように韓国にはムーダン、ポサル、チョムジェンイ、タンゴルなどと呼ばれる民間宗教者が活動している。それらは女性が主であるため、巫女とも称される。巫女は人々からの依頼によって、クツと呼ばれる儀礼を実施する。クツとは、数人の巫女および楽士による歌舞や楽器演奏によって実施される儀礼を指し、いくつかの進行過程が順次進められていくことで一つのクツが構成される。クツには巫女や依頼者だけでなく、見物人も集まる。巫女が行なうクツには悪運を祓って幸運を招くものや、死者をあの世に送るものなどがある。

韓国の巫女には、神霊が降りてきたために成巫した降神巫と呼ばれる者と、世襲によって歌舞や楽器演奏の技能を継承してきた世襲巫と呼ばれる人々がいる。降神巫は韓国全域に分布しており、ムーダン、ポサル、チョムジェンイなどと呼ばれる。一方、世襲巫は韓国の南部に分布しており、タンゴルなどと呼ばれる。クツの進行過程のなかで、降神巫は自身に神霊や死者を憑依させて託宣や口寄せを行なう一方、世襲巫は自身に神霊や死者を憑依させることはない。降神巫によるクツと世襲巫によるクツにはこのような相違があるが、降神巫によるものも世襲巫によるものも、同じくクツと呼ばれる。

韓国の東海岸（日本海側）で活動する世襲巫を調査した崔吉城は、降神巫によるクツであっても世襲巫によるクツであっても、それぞれの進行過程において、はじめは日常的な所作、リズム、テンポで行なわれていた歌舞や演奏が、次第にリズム、テンポが速まり、踊りの所作も激しくなる。そしてついには楽

器の演奏による騒音のなかで歌も唄われなくなり、踊りも所作というよりも激しい動きとなる。それによって日常を超越して神の世界との疎通が可能になる状況が生まれる。クツの目的は日常を超越して、神の世界と疎通することにある。降神巫が自身に神霊を憑依させるのも、このような歌舞や演奏が日常を超越した段階になったときである。降神巫によるクツであっても世襲巫によるクツであっても、クツの本質は歌舞や演奏を通じての日常からの超越と神の世界との疎通であると指摘する〔崔吉城 1989:61-62〕。

このように崔吉城は、歌舞や演奏の所作、リズム、テンポが作り出す日常性から非日常性への転換を通じて神霊の世界と疎通することが、降神巫によるクツと世襲巫によるクツの双方に共通するクツの本質であるとみている。そして降神巫への神霊の憑依については、神霊の世界との疎通のあらわれ方の一つとみているようである。

筆者が調査してきた韓国の南西部、全羅南道珍島で活動する世襲巫が実施するクツ、すなわち死者をあの世に送るシッキム・クツに関しても、世襲巫は「舞と歌と音楽を重要な媒介として神や霊と意思を通わす」とされ、「音楽はクツの核心的な要素として作用しつつ、人をカミと触れあう状況に没入させる」という見方がある〔劉永大 1999:197〕。珍島の世襲巫はクツにおいて神霊に憑依されることはないが、歌舞と音楽によって神や霊の世界と意思を通わすというのである。

ところで先述のように崔吉城は、降神巫への神霊の憑依を神の世界との疎通のあらわれ方の一つとみているようであるが、珍島の世襲巫が行なうクツにおいても神霊の憑依、すなわち憑

霊現象がみられる¹。そこでは世襲巫への憑依は生じないが、クツの依頼者に死者が憑依する場合がある。憑依される者が巫女か依頼者かという違いはあるが、憑霊現象は降神巫によるクツだけでなく、珍島の世襲巫によるクツにおいても生じる。クツの本質が日常からの超越であり、神霊の世界との疎通であるとするならば、憑霊現象は神霊の世界との疎通の具体的なあらわれ、顕現といえるであろう。本稿は、クツの最中に顕現する憑霊現象について検討するものである。

2. クツで顕現する憑霊

珍島の世襲巫が実施する代表的なクツに、死者の魂を浄化してあの世に送るシッキム・クツがある。

シッキム・クツでは先述のように世襲巫自身に死者が憑依することはないが、クツの依頼者がクツの最中に、あの世に送る対象とされる死者に憑依されることがある。例えば土佐昌樹の報告によれば、死亡した夫のためにシッキム・クツの実施を世襲巫に依頼した未亡人が、クツの最中に亡夫に憑依されて踊ったり、クツの集まった人々と酒や会話のやり取りをしたりして騒動を起こし、ついには世襲巫やクツに集まった人々から、静かにするように咎められたという。そのような出来事について「後日、本人（亡夫に憑依された未亡人：筆者注）に訊ねたところによれば、この日のクツに関しては「魂迎え」（シッキム・クツの前半の進行過程で行なわれる死者の魂を迎える儀礼：筆者注）のため村の境界まで出て行った後のことは一切記憶になく、後で人から話を聞いてたまたげたということだ」とも報告されている。そして土佐は、このような依頼者への死者の憑依は頻繁に起こる現象ではないが、しかしそれは、亡夫に憑依された未亡人の特異な性格や偶然に由来する異常な出来事ではなく、一定の伝統的観念を共有する集団内部での自然な展開であったと指摘している〔土佐 1989:375-393〕。

このようなクツの依頼者への死者の憑依のほか、シッキム・クツではもう1種類の憑霊現象が見られることがある。すなわちシッキム・クツの進行過程のなかで、世襲巫が竹竿（ソンドと呼ばれる）を握る者に死者を降ろし、竹竿を握る者の口を通して死者が自分の心情を語るという儀礼が行なわれる場合がある。遺族の一人が竹竿を握ることが多いが、遺族以外の者が握ることもある。しかし必ず死者が降りるとは限らず、降りないこともある〔池春相 1979:27-28〕。

このように珍島の世襲巫によるシッキム・クツでは、依頼者への死者の憑依と竹竿を握る者への死者の憑依という2種類の憑霊現象が見られる場合がある。

ところで珍島では世襲巫のほか、降神巫も活動している。両者には役割分担があり、住民は家庭に何か問題が生じた場合、先ず降神巫にその原因を占ってもらい、その判断にしたがって、問題を解決するために世襲巫にシッキム・クツなどの各種儀礼の実施を依頼してきた。このように降神巫は占いだけを行ない、シッキム・クツなどの儀礼を実施するのは世襲巫であった。

しかし1970年代ころから、シッキム・クツなどの儀礼を自ら行なう降神巫があらわれるようになった。先述のように降神巫は、クツの進行過程のなかで自身に神霊を憑依させる。珍島の降神巫たちも、自らに神霊や死者を憑依させて行なう託宣や口寄せを進行過程のなかに組み込んで、世襲巫のものとは異なる降神巫独特のシッキム・クツを行なうようになった。自らに死者を憑依させて口寄せを行なう降神巫によるクツでは、竹竿を握る者に死者を憑依させて死者の心情を語らせる儀礼は行なわれないのが一般的のようである。

一方、クツの最中に依頼者があの世に送る対象とされる死者に憑依されることは、降神巫が行なうクツでも生じることがある。筆者が観察した事例でも、あの世に送る対象とされた死者に憑依された依頼者は、はじめは降神巫やクツに集まった見物人たちから踊りを促されたり酒を酌み交わしたりして、賑やかな雰囲気をつくっていたが、やがてその言動がクツの進行を妨げるようになり、見物人たちから静かにするように言われていた〔川上 2011:69-82〕。

降神巫がシッキム・クツを行なうようになってことで、世襲巫によるクツで見られる依頼者が死者に憑依される場合および竹竿を握った者が死者に憑依されることに加えて、降神巫が自らに神霊を憑依させるという3種類目の憑霊現象が珍島のシッキム・クツで見られるようになったといえるであろう。

次に珍島以外の地域の例として、ソウルを含む京畿道地域で行なわれるクツで生じる憑霊について取りあげてみる。京畿道地域では降神巫が活動しており、降神巫はクツの進行過程のなかで自らに神霊や死者を憑依させる。死者をあの世に送るために行なわれるチノグイ・クツを例としてあげるならば、そこでも降神巫が自身に死者を憑依させて口寄せが行なわれる〔秋葉〔1954〕1980:91-93；趙興胤 1993:81-86〕。

このような降神巫自身への憑依に加えて、京畿道地域の降神巫によるクツでは、依頼者やクツに集まった見物人にも「憑依トランス」が生じるという指摘がある〔L.Kendall 1983〕。それはクツの進行過程の合間の休息時に、依頼者の女性や見物人の女性たちが踊るムガムと呼ばれる行為において生じる。ムガムではクツの依頼者や見物人が降神巫の叩く太鼓の伴奏に合わせて、降神巫が自身に神霊を憑依させるときと同様の踊りを行

¹ 神霊や精霊もしくは霊的な力が憑くのは人間に限らず、動物、自然物、人工物にも憑いて、それらの物に霊能を生じさせることも憑霊現象に含まれるという見解もあるが〔佐々木 1984:60〕、

本稿では憑霊を「ある人物の行動が通常その人物に外在する精霊によってコントロールされている証拠と解釈される」現象として扱うことにする〔R.Firth 1969:247〕。

韓国の巫俗儀礼と憑霊

なう。そして、しばらく踊ると彼女たちは床に倒れ込む。先学によれば、このムガムは、踊りを行なう女性たちが、彼女たちの婚家と世代を超えて関係を保ちつづけている神霊を楽しませ、家庭に幸運を授けてくれるようにするために行なわれる。さらには、まれな場合ではあるが、踊っている女性にその婚家と関係をもつ神霊が憑依して、女性の口を通じて心情を述べることもあるという。

ムガムでの踊りを「憑依トランス」とみることに異論もある²。しかし、まれにしか起こらないとはいえ、依頼者や見物人がその婚家と関係をもつ神霊に憑依され、神霊が憑依した人物の口を通じて心情を語るという現象は、クツにおいて顕現する憑霊現象の一つとみることができそうである。

また、珍島の世襲巫によるクツで見られる竹竿を握る者に世襲巫が死者を降ろすという形態と類似した憑霊が、降神巫によるクツでも見られることが報告されている〔Chongho Kim 2003:27-28,30-31〕。報告によれば、木の棒（神将デと呼ばれる）を握る者に神霊や死者を憑依させる儀礼が、地域的に関係なく、降神巫によって一般的に行なわれているという。この棒を握る者は降神巫の場合もあれば、依頼者の場合もあり、またこの儀礼を行なっても神霊や死者が降りないことがあるという。

3. クツで生じる憑霊の分類

以上のように韓国の巫女（世襲巫、降神巫）が行なうクツで顕現する憑霊現象には、クツの進行中に生じる依頼者への死者の憑依、婚家と関係をもつ神霊を楽しませるために踊る依頼者や見物人へのそれら神霊の憑依、竹竿や木の棒を握る者への死者や神霊の憑依、そして巫女（降神巫）自身への死者や神霊の憑依を指摘することができる。ここでは、クツで顕現するこれら憑霊現象の特徴を検討してみる。

まず降神巫が自身に神霊や死者を憑依させて託宣や口寄せを行なうのは、クツで生じる他の憑霊に比べて、神霊や死者の扱いが最もコントロールされたものといえるであろう。降神巫は必ず神霊や死者を自身に憑依させ、失敗することはない。この点で神霊や死者よりも降神巫に主導権がある憑霊といえる。

ただし、降神巫側に完全に主導権があるとまではいえないようである。降神巫が自らに死者を降ろすのに失敗することはないが、降ろす予定ではなかった死者が降りてきてしまうことがある。珍島の降神巫の場合、シッキム・クツなどで降神巫が自身に憑依させるのは、あらかじめ供物などが用意され、儀礼の場に招かれることになっている死者であるのが一般的である。

しかし、時には供物が用意されていない死者が降神巫に憑依して口寄せを行なうことがある。あらかじめ招かれることになっていたのではない死者が、自らの意向で降りてきてしまうのである〔川上 2011:145-164〕。

また、京畿道地域で行なわれるクツにおいて、降神巫に憑依して口寄せを行なう死者の数は一定しておらず、如何なる死者が降神巫に憑依してくるのか、あらかじめ知ることはできないと報告されている〔任敦姫 1988:144〕。京畿道地域の降神巫も、死者を降ろすことには失敗しないが、どの死者が降りてくるかまではあらかじめ知ることはできないという。

このようにみると、降神巫が自らに死者や神霊を憑依させる憑霊は、降神巫側に主導権があり、クツで生じる憑霊のなかで神霊や死者に対するコントロールが最もできているものとみられるが、憑依する神霊や死者の側の意向も残されているといえるであろう。

これに対して、珍島のシッキム・クツで見られる依頼者への死者の憑依は、必ず生じるものでも、憑依された依頼者が望むものでもなく、突発的に生じ、またクツの進行の妨げにもなることから、巫女や依頼者などの生者よりも死者に主導権がある憑霊といえる。

京畿道地域でのムガムで見られる依頼者や見物人の女性たちへの憑依は、依頼者や見物人が自分の婚家と関わりのある神霊を楽しませるという目的のために踊ることによって生じることから、生者側に神霊に接近しようとする意図があり、珍島のシッキム・クツで生じる依頼者への死者の憑依のように突発的に生じるものとはいえない。しかし神霊がムガムの踊りをする者に憑依するのはまれであるため、神霊側に主導権のある憑霊といえるであろう。

世襲巫が竹竿を握る者に死者を降ろし、死者が竹竿を握る者の口を通じて心情と語る現象や、降神巫が棒を握る者に死者や神霊を憑依させる現象は、巫女（世襲巫、降神巫）が神霊や死者をコントロールして竹竿や棒を握る者に憑依させようとする形態である。しかし必ず神霊や死者が降りるとは限らないため、巫女は神霊や死者を完全にはコントロールできていないようである。

先に、クツを自ら行なうようになった珍島の降神巫は死者を自身に憑依させ、竹竿を握る者に死者を降ろす儀礼は行なわないのが一般的のようであると述べたが、筆者は珍島での調査の際、降神巫がクツの最中に依頼者やその家族に死者や神霊を降ろそうと試みた事例に出会ったことがある。その事例では、依頼者や家族は竹竿や棒を握ってはいなかったが、結局、死者や

² 崔吉城は、ムガムの踊りをする人のなかには「神が降りた状態に近かったり、ムーダン（降神巫：筆者注）と似た行動をしたりする人もいるが、それを一般的な状態とみるのは誤りである。ムガムはどこまでも一般人が神の徳を授かるようとする行為

に過ぎない。ムガムをする場合に激しい興奮状態がともなう場合があるが、これは踊りという激しい肉体的行為からくるものであり、ムーダン（降神巫：筆者注）の降神状態とは本質的に異なる」と述べる〔崔吉城 1989:54〕。

神霊は降りず、その代わりとして降神巫は自身に死者や神霊を降ろし、死者たちの意向を依頼者に伝えた〔川上 2011:60〕。依頼者に死者や神霊を憑依させようとする場合、降神巫は自身に憑依させるほどにはそれらをコントロールできないようである。

その一方、竹竿や棒を握る者に神霊を降ろす儀礼はクツの進行過程のなかに組み込まれており、珍島のクツで見られる依頼者に死者が憑依する場合ほど突発的なものとはいえない。竹竿や棒を握る者に死者や神霊を降ろす憑霊現象は、主導権からみた場合、降神巫が自身に憑依させるほどには死者や神霊をコントロールできておらず、死者や神霊の側に指導権が残っているといえる。他方、死者が突発的にクツの依頼者に憑依する場合や、ムガムでの踊りをする依頼者や見物人の女性たちに彼女たちの婚家と関係のある神霊が憑依する場合よりは、巫女が死者や神霊のコントロールを試みているといえる³。

4. 棒を握る者に神霊を憑依させる儀礼

以上のように憑霊現象に注目するならば、クツで顕現する憑霊現象には4種類あるといえる。降神巫によるクツでは、降神巫自身に神霊や死者を憑依させるという降神巫主導の憑霊が顕現する。また、クツの依頼者や見物人が、その婚家と関係のある神霊を楽しませて幸運を授かろうとして踊る際に、それらの神霊に憑依されることもある。踊る者には神霊に接近しようとする考えが多少とも存在するのではないかと思われるが、踊る者に神霊の憑依が生じることはまれであり、依頼者や見物人主導の憑霊とはいえない。世襲巫によるクツでは、突発的に死者がクツの依頼者に憑依するという、死者に主導権のある憑霊が顕現する。

³ 依田千百子は、珍島の世襲巫が竹竿を握る者に死者を降ろす儀礼に関して、「タンゴル（世襲巫：筆者注）は死霊を遺族の一人に憑けるための「死霊の統御者・操作者」としての役割をはたしていることを示している」と述べている〔依田 1991:347〕。依田が使用する「死霊の統御者・操作者」という語は、S.M.シロコゴロフがツングース（エヴェンキー）族の宗教者サマン（宗教者を分類する用語の一つであるシャーマンは、このサマンに由来するとされる）の特徴を *master of spirits* とし、それを佐々木宏幹が「精霊の統御者」と訳したことと関係があると思われる〔佐々木 1980:37〕。

シロコゴロフが *master of spirits* としたツングース（エヴェンキー）族のサマンは、疾患や死亡率の上昇、出生率の低下などをもたらして氏族を存亡の危機にさらす邪悪な精霊を降伏させ、それらの精霊を支配、統制する「主人」になる。それによって氏族の危機はなくなるという〔史禄国 1984:566-568〕。ツングース（エヴェンキー）族のサマンは自分が支配、統制するようになった精霊の援助を受けて他界に赴くことができるが、佐々木は形式上、役割上の類似から、自分の守護霊を第三者に憑依させる宗教者についても「精霊の統御者」という語を使用している〔佐々木 1980:189-192〕。

さらには、世襲巫によるクツでは世襲巫が竹竿を握る者に死者を、降神巫によるクツでは降神巫が木の棒を握る者に死者や神霊を憑依させ、憑依された者が死者や神霊の言葉を語る場合がある。これらの儀礼では死者や神霊が降りないこともあるため、巫女が死者や神霊をコントロールしようとしながらも、死者や神霊の側に主導権が残っている憑霊といえる。このようなタイプの憑霊現象は、世襲巫によるクツ、降神巫によるクツを問わず、韓国のクツに共通して見られる。キム・チョンホは、韓国のシャーマニズムの特徴は神霊が語ることにあり、ある場合には巫女自身が神霊に代わって語り、ある場合には棒を使って神霊が語ると述べている〔Chongho Kim 2003:35〕。

ところで、降神巫のクツで見られる神将デと呼ばれる木の棒については、朝鮮総督府が刊行した『朝鮮の巫覡』にも記載があるが〔村山 1932:605-606〕、秋葉隆の報告によれば、棒を使用したのは同じ民間宗教者ではあっても巫女ではなく、男性の経読みであった〔秋葉〔1959〕1980:80-90〕。また秋葉は、男性の経読みが祈禱する間に、棒を持ってはいないが、依頼者の女性に憑依が発生したとみられる事例も報告している〔秋葉〔1959〕1980:80,96〕。

このような先学の報告を参照すれば、降神巫のクツで見られる神将デと呼ばれる棒の使用や依頼者への死者や神霊の憑依は、以前には男性経読みの儀礼で見られたものであった。そして、ある時点で棒の使用と依頼者への憑霊が降神巫によるクツにも取り入れられ、世襲巫のクツで見られる竹竿を握る者に死者を降ろすという形と類似した憑霊が行なわれるようになったのではないかと、現在のところ推測される⁴。

降神巫のクツに棒を握った者への憑霊、すなわち神霊や死者の側に主導権が残っている憑霊が取り入れられるようになった背景については、現在のところ次のように推測される。

このように「精霊の統御者」とは支配、統制する精霊や守護霊を使役する宗教者を表現する語である。一方、珍島の世襲巫が竹竿を握る者に死者を憑依させる行為は失敗することもあり、死者を支配、統制しているとはいきれない。したがって「死霊の統御者・操作者」としての役割を果たしているという表現は適切さに欠けると考えられる。

⁴ 世襲巫による竹竿を握る者に死者を憑依させる儀礼と、降神巫による棒を握る者に神霊や死者を憑依させる儀礼とは、もともと別系統のものであったとも推測される。

依田は、済州島では死者がその「直系近親の女性に憑依する」トゥルリンダという現象が見られることなどから、韓国では元来、死者は「遺族（女性親族）の一人に憑依するタイプがその原型に近いものであったのではなかろうか」と述べ、それが世襲巫によって儀礼に組み込まれ、竹竿を握る遺族などに死者が憑依する形態となり、さらに北方的なシャーマニズムと習合して、降神巫が自らに死者を憑依させる形態になったと推測している〔依田 1991:345-353〕。依田の考察には、降神巫による棒を握る者への憑霊は考慮されていないようである。韓国の巫女による儀礼で見られる憑霊現象は、降神巫による棒を握る者に神霊を憑依させる儀礼も視野に入れて検討する必要があるだろう。

韓国の巫俗儀礼と憑霊

降神巫自身に神霊や死者を憑依させる形態は、巫女側に主導権があり、完全にではないが神霊や死者をほぼコントロールし、失敗することはない。失敗することがないということは、降神巫自身への憑霊は、クツのなかでいわば定型化、定例化されたもの、予定されたものとなっていく可能性がある。定型化、定例化、予定された憑霊は、依頼者や見物人に与える神霊の顕現の衝撃度は弱いものになってしまうのではなからうか。さらに言えば、降神巫自身への憑霊は、依頼者や見物人から見れば、いわば演じられるものとみなされる可能性がある。

それに対して神将デと呼ばれる棒を握った者への憑霊については、巫女は神霊や死者をコントロールしきれておらず、神霊や死者の側に憑依の主導権が残されている。したがって降神巫自身に神霊や死者を憑依させる定型化、定例化された憑霊よりも、依頼者や見物人に与える神霊の顕現の衝撃度は強いものになると考えられる。

かつて桜井徳太郎は、世襲巫が活動する地域で降神巫の活動も見られる状況に関して、自身に神霊を憑依させることなくシャーマニズムの機能が衰退した世襲巫に代わって降神巫がシャーマニズムの機能を果たすようになり、それが地域社会の人々に歓迎され、民俗信仰を支えていると解釈したことがある〔桜井 1995:138-149〕。そのような解釈を参考にすれば、棒を握る者に神霊や死者を憑依させる儀礼が降神巫のクツに取り入れられたことについても、定型化、定例化された憑霊よりも神霊の顕現の衝撃度が強い憑霊を人々が期待するようになり、降神巫もその期待に応えるため、神霊や死者に主導権がある棒を用いる憑霊をクツに取り入れるようになったと推測することができる。

5. むすびとして

本稿の最初に、韓国の巫女が行なう儀礼クツの特色は歌舞や演奏を通じての日常からの超越と、その状況における神霊の世界との疎通であるとする先学たちの見解を紹介した。そして本稿では、憑霊現象を神霊の世界との疎通の顕現とみて、クツの最中に顕現する憑霊現象について検討した。

本稿で検討したようにクツで顕現する憑霊には、降神巫自身への憑霊、依頼者や見物人へのその婚家と関係のある神霊の憑依、依頼者への突発的な憑霊、竹竿や棒を握る者への憑霊の4種類ある。先学は、クツにおいて人々は歌舞や演奏の展開のなかで神霊の世界と疎通すると指摘するが、神霊の世界との疎通の顕現とみられる4種類の憑霊現象のうち、クツの進行に合わせて歌舞や演奏の展開のなかで顕現する憑霊は、降神巫自身への憑霊である。

この形態の憑霊は巫女側に主導権があり、完全にではないが神霊や死者をほぼコントロールし、失敗することはない。降神

巫自身への憑霊は、クツにおける歌舞や演奏が日常的な所作、リズム、テンポを超えた激しいものとなった際に生じる。すなわちクツのなかでの歌舞や演奏の展開の延長線上で生じるものであり、クツのなかでいわば定例化したものとなっている。さらに言えば降神巫自身への憑霊は、依頼者や見物人から見れば、いわば演じられるものとみなされる可能性があり、依頼者や見物人が受ける衝撃度は弱いものになってしまうのではなからうか。

降神巫によるクツでは、依頼者や見物人がムガムの踊りを通じて、それぞれの婚家と関係する神霊に憑依される。ムガムの踊りは、踊る者自身が踊りを通じて神霊に接近しようとするものと考えられ、巫女が踊る者に神霊を降ろそうとするものではない。踊りは、降神巫が自身への憑霊を求めて行なう際と同様の踊りの所作、演奏のリズム、テンポで行なわれ、歌舞や演奏の展開の延長線上で生じるといえる。実際に憑依が生じるのはまれであるとされることから、憑依が生じた場合、見物人たちが受ける衝撃度は強いのではないかと予想される。ただし大部分の場合は、憑霊は顕現せず、踊りとして終了する。先学は、ムガムによる踊りは「参加者を一種のエクスタシーに導く強烈な作用をなす」というが〔依田 1991:362〕、実際に憑霊現象が顕現することはまれであり、クツの進行過程の合間に行なわれる娯楽となる可能性が高い。

世襲巫のクツで見られる依頼者への死者の憑依は、突発的で、巫女のコントロールとは無関係の、クツの進行の妨げにさえなる憑霊である。その分、人々が受ける神霊の顕現に対する衝撃度は高いと考えられる。

また、竹竿や棒を握る者への憑霊も、巫女が死者や神霊をコントロールしきれておらず、死者や神霊の側に憑依の主導権が残されている。したがって憑霊が顕現した場合、降神巫自身に神霊を憑依させる定例化された憑霊よりも、クツの見物人に与える衝撃度は強いと考えられる。竹竿や棒を握る者に死者や神霊を降ろす儀礼は、クツの進行過程の一つに組み込まれているが、歌舞はともなわず、最初から鉦や銅鑼などによる非日常的な喧騒のなかで行なわれる。先学がクツの特色とする歌舞や演奏による日常性から非日常性への展開を通じての神霊の世界との疎通とは異なる内容のものである。

憑霊現象は神霊の世界との疎通の顕現と考えられるが、世襲巫のクツでの依頼者への死者の憑依や、世襲巫と降神巫のクツ双方で見られる竹竿や棒を握る者への死者や神霊の憑依は、降神巫自身に死者や神霊を憑依させる場合よりも、見物人にとって衝撃度は強いものと思われる。このような憑霊は、先学がクツの本質として指摘する歌舞や演奏の展開とは異なるところで生じていると考えられる。

〔引用文献〕

- 秋葉 隆 [1950] 1980 『朝鮮巫俗の現地研究』名著出版
- 川上新二 2011 『死者と生者の民俗誌－韓国珍島 巫女の世界－』岩田書院
- 桜井徳太郎 1995 「アジアのシャーマニズム－フィールド・ワークの経験を通して－」諏訪春雄・川村湊編『アジアの靈魂観』雄山閣
- 佐々木宏幹 1980 『シャーマニズム－エクスタシーと憑靈の文化－』中央公論社
- 1984 『シャーマニズムの人類学』弘文社
- 土佐昌樹 1989 「憑依の現在－韓国珍島における巫俗儀礼の記述と解釈－」『民族学研究』53 卷4号
- 村山智順 1932 『朝鮮の巫覡』朝鮮総督府
- 依田千百子 1991 「ムードン」植松明石編『神々の祭祀』凱風社
- 劉 永大 1999 「生きている人のためのクッ－珍島シッキムクッの次第と理念－」鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究－日本と韓国－』第一書房
- 任敦姫 1988 「한국 조상의 두 얼굴－조상 덕과 주상 덕－」『韓國民俗学』21 (서울)
- 趙興胤 1993 「살아 남은 가족들과 망자의 작별과 잔치」『서울 진오기굿』悅話堂 (서울)
- 池春相 1979 「珍島 싯김굿의 概要」『珍島 싯김굿』無形文化財調査報告書第 129 号 (서울)
- 崔吉城 1989 『한국민간신앙의연구』계명대학교출판부(대구)
- 史禄国 (吴有刚, 超复兴, 孟克 译) 1984 『北方通古斯的社会组织』内蒙古人民出版社 (呼和浩特)
- Chongho, Kim 2003, *Korean Shamanism-The cultural paradox*, Gower House : Ashgate Publishing Limited.
- Firth, Raymond 1969, *Essays on Social Organization and Values*, London: Athlone Press.
- Kendall, Laurel 1983, Mugam : the dance in Shaman's Clothing, in : the Korean National Commission for UNESCO (eds.), *Korean Folklore*, Seoul: the Si-sa-yong-o-sa Publishers, Inc.

(提出日 平成30年1月9日)